

魔界。

人間の住む地上から隔絶された、遙か地底深くに存在する、魔族や化物の住まう地。
その中心にそびえる山の頂に、その城はあった。

「デスキヤツスル
死の王城」。

圧倒的な力を以て魔族を統べる、若き王デスピサロ。その居城である。

*

「今宵集まつてもらったのは、他でもない…」

そう切り出したのは、上質な僧服を着た、年老いた男。
顔に刻まれた皺が、衰えではなく、逆に淒みを感じさせる。

魔王デスピサロの四人の側近、人呼んで「デスピサロ四天王」の筆頭にして、一癖も二癖もある四天王たちをまとめ上げる、彼らの要。

デスピサロに惚れ込み、その地上制覇の野望に、己の全てを捧げる男。

魔族軍の戦略のすべてを立案指令する、深謀遠慮の大参謀。

そして、「魔界四大軍団」のひとつ、「不死化物」、魔法使いなどより成る「呪霊軍団」軍団長。

《邪神官》エビルプリーストである。

ここは、デスキヤツスルの大 会 議 室。

王城において最も大きな面積を占めるこの部屋で今行われているのは、デスピサロを含まない、「四天王」の四人のみが参加する、いわゆる「四天王会議」と呼ばれる会議である。

デスピサロの耳に入るまでもないものの、四天王ひとり、軍団ひとつ手には余る程度の事案につき、四天王が合議し対応を決定する、そのための会議である。

魔族軍の行動に関し、デスピサロ及び四天王が集う「御前会議」に次いで強い決定権を持つ、とされていた。

その一方で、この会議は、「デスピサロの耳に入れたくない事案を、四天王レベルで秘密裡に解決する」目的でも、しばしば開催されていた。

そして、今。

デスピサロの耳に入れたくない、しかし、軍団ひとつでは手に負えない。
そのような事態が、まさに発生していたのである。

その事態とは…

*

《勇者》ディラジーナと「導かれし者たち」の長い旅路の中でも、^{おおやけ}公に記録されていない、彼女たちと直接関わった者の記憶にしか残っていない、そのような戦いがある。

その中のひとつ、フレノール南の集落の住民誘拐に端を発した、魔道士ブライと、魔族軍・魔鬼軍団の精銳《漆黒の部隊》との激闘。

この物語は、知る者の少ないその戦いの、その更なる暗部を、克明に描いたものである！

暗闇系（？）ドラクエ4二次創作小説

「ブライ様ファイト！ — Episode Zero —

～ ビッグフォー・カンファレンス
四天王会議は踊る、されど～」

（スクウェアエニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第五章より）

あさづけ兄貴

「グリーンヘアード
『緑の髪の少女、か』」

バリトン 低音が、大會議室に響く。

声の主は、エビルプリーストの倍はあろうかと言う身の丈の化物であった。

モンスター

胸や腕の、蒼い鉛色の膚の下に見える、発達した筋肉。

下半身は、獣のように、全体が濃い青の毛で覆われている。

茶色の頭髪に覆われた頭から、まるでその存在を誇るかのごとく生える、二本の大きな
黄金色の角。

もみあげから顎に続く、髪と同じ茶色の長い髭。

背中からは、蝙蝠のような、一対の大きな翼。

獣や人型の魔物などより成る、魔界の陸海軍とも呼べる「獣士軍団」、その軍団長。

ルール無用、利己主義者の集団である化物たちの中にあって珍しく、「正々堂々」を重
んじる漢。

デスピサロに絶対の忠誠を近い、魔族に義を置く、魔界随一の武人。

その名を、《邪戦将》ヘルバトラー。

壁にもたれ掛かり腕組み、目を閉じたまま、エビルプリーストの話を聞いていたヘルバトラーが、エビルプリーストに答えて言ったのが、この言葉である。

「うむ」

首肯するエビルプリースト。

眼光が、鋭く輝く。

*

「グリーンヘアード
『緑の髪の少女』。」

それは、この物語の主人公、我らが雷少女、《勇者》ディラジーナことディルの、魔界軍における呼称である。

魔界軍は、約1年前に、《勇者》ディルが人知れず育てられていた山奥の村を急襲、そこにいた「勇者」を殺害した。

よって、魔界軍内部では、「勇者」はもはやこの世には存在しない、とされていたのである。

すなわち、ディルは「勇者」ではない。魔族がディルを「勇者」ではなく「緑の髪の少女」と呼ぶ所以にある。

グリーンヘアード

しかし、事実は違った。

彼らが「勇者」として殺害したのは、実のところ、他者摸装呪文モシヤスでディルに化けた、彼女の親友・シンシアであったのだ。

ディルは生き残り、そして、導かれし者たちと出逢う。

彼らの絆に端を発した「運命のうねり」が、やがては世界を、すべての人間たちを突き動かしていった。

それが、キングレオ城・サントハイム城の解放、ひいては、その戦いを通して結成された、史上初の国際機関「神聖王家同盟」ホーリーアライアンス成立、そして何より、同盟による「対魔族戦争における、意志と軍事力の一本化」につながってゆく。

「勇者」の存在が、魔族と戦う力を、人類にもたらしたのである。

そして更に、「勇者」が生きていた意味は、それだけではなかった…

このことは、程なく、エビルpriestの口から語られることとなる。

*

「グリーンヘアード エスターク
『緑の髪の少女…。帝王を倒し、天空の武具を揃えやがった』」

そして、第三の人物が口を挟む。

またしても、巨躯の持ち主であった。

身の丈はヘルバトラーとほぼ同様…しかし、筋肉質であるヘルバトラーと異なり、全身が丸く、太った印象を与える。

とはいって、その腕や脚、また鱗に覆われていない胸や腹には、ヘルバトラー同様に、十分に発達した筋肉が見て取れる。

紫色のごつごつした鱗に覆われた背中。

銀色に光る目と、耳まで裂けた口。

頭には、鈍い鉄色の、短い七本の角。

そして、背に、その体重を空に舞い上げるにはいささか小振りな、一対の翼。

「鬼」「悪魔」と呼ばれる存在や、魔法生物より成る「魔鬼軍団」軍団長。

姑息な戦術と強引な力押しとを使い分け（それ自体は、決して他の四天王には良く思われてはいなかったが、結果として）、数々の魔族軍の策謀を成功に導いた、卑劣なれど恐るべき指揮官。

《邪鬼王》ギガデーモンである。

彼の言葉に続けるヘルバトラー。

「あの少女、そしてそれに付き従う者ども…」

「奴らが強い、というだけではない。奴らは人間どもの心をひとつにまとめ上げつつある」

眉根を寄せ、苦々しげに言うエビルpriestに、ギガデーモンが食って掛かる。

「ふん、人間ごときがどれだけ東になろうと」

「いつも言っているはずだ。人間を侮るな」

睨みを利かすエビルpriest。

「貴様の言う通り、一人一人の人間は脆い。が、奴らは、東になればとてつもない力を出す」

「確かに」

口を挟むヘルバトラー。

「キングレオも、サントハイムも、それで失ったのだったな」

そう。

彼らは、一度支配を確立したキングレオ王国と、王家を主とした支配権力を無力化したサントハイム聖王国を、当初予想だにしていなかった人間の反抗により、悉く失っていたのである。

その直接・間接のきっかけとなったのが、《緑の髪の少女》ディラジーナと「導かれし者たち」が、少しずつ、少しずつ紡いで行った「絆」の力であると、四天王たちも、正しく認識していたのである。

とは言え…

「ふん」

面白くなさそうに鼻を鳴らすギガデーモン。

「人間の王子や鍊金術師なんかに任せておくからだろうが」

「確かに、それもあるやも知れん」

表情を変えずに、エビルpriestは答えた。

魔族が、あらゆる面で人間よりも優れた存在である、と信じるギガデーモン。

エンドール武術大会でアリーナがベロリンマンを倒す瞬間を目撃し、人間の秘めた力に恐怖したエビルpriest。

その認識には、少なからぬ乖離があったのである。

「が、今問題にすべきは、そのことではない」

エビルpriestが続ける。

「緑の髪の少女が、天空の武具をすべて集め、塔を登った。これは間違いなく、我らの敵が人間だけではなくなる、その兆しだ」

「人間だけでは…」

「なくなる？」

「左様」

さらに続ける。

「天空の塔は、遙か天上、奴らの神の下へと至る道なのだ」

「奴らの…神…」

その言葉で、彼らが思い起こす存在。

恐怖と、憎悪とともに。

それは、ひとつしかなかった。

マスター ドラゴン
「竜の王 …」

苦々しい、ヘルバトラーの口調である。

「そうだ。緑の髪の少女は恐らく、あの忌々しい天空の王に会ったであろう。ならば、あれも、そして天空の住人共も、人間と共に闘する可能性が極めて高い」

エスターク
「帝王 封印戦争の再来、ということか」

「人間も、天空の奴らも、地上で俺らにでけえ顔されちや、困るもんなあ」

「それどころではない。我らが滅ぶぞ」

ゴクッ。

ギガデーモンの喉が鳴る。

グリーンヘアード
「なればこそ、あの天空の王と人間とを繋ぐ者…緑の髪の少女は倒さねばならない。早急に」

「そいつあもう聞き飽きた… ずっと、あんたはそう言ってたじやねえか。ずっと」

いつになく、ギガデーモンの口調は厳しい。

「だが、倒せなかった。そうだろう？」

ギガデーモンの耳まで裂けた口が、ニヤリと、笑う。

下卑た笑み。

「そうだ」

表情を変えずに、エビルプリーストは言った。

「この件は、我が『呪霊軍団』の…いや、我の手にも負えなくなった。そう判断した」

「ほう、いつになく弱気じやねえか」

嘲るような、厭らしいギガデーモンの声にも、変わらぬ調子でエビルプリーストは続ける。

「力を貸してほしい。貴様らを、同じ四天王と見込んでの頼みだ」

「頼み、と来たか」

目を閉じたまま、ヘルバトラーが口を開く。

「俺もギガデーモンと同じ感想だな。どうした。その弱気、貴公らしくない」

エビルプリーストの「弱気」の理由は、実は、存在した。

グリーンヘアード
緑の髪の少女…ディラジーナが、エスタークを倒した。

決して艶れ得ぬはずの「地獄の帝王」が、倒されてしまった。

つまり、唯一エスタークを倒すことができるといわれる存在…「伝説の勇者」の存在が現実のものであることが、図らずも、証明されてしまったのだ。

そして同時に、それが、今まさに彼ら魔族軍に仇なす者たちの中心にいる《緑の髪の少女》であるということも。

「勇者」はすでに、デスピサロ自らの手により、あの山奥の村で倒されていたはずなのに。

エビルプリーストが、ずっと胸の中に抱いていた懸念。

生かしておいてはならない敵が、生きている。

それが現実となり、今、彼らの前に立ちはだかっていたのである。

目を開き、苦笑するヘルバトラー。

「亡者どもすら恐れる邪神官殿にも、焼きが回ったか」

それを、エビルプリーストが一睨み。

「何を言われようと構わん。あれらを倒す、それさえ成るのであれば、どれほどの恥辱にまみれようとも、な」

重い沈黙。

今回の事態の異常さを、ヘルバトラーは悟った。

この恐るべき邪神の使徒が、過去に、ここまで弱気になったことがあったか。

先程のヘルバトラーの言葉の如く「亡者すら恐れおののく」と言われるこの男が、過去に、ここまで追い詰められたことがあったか。

これはまさに、前代未聞の事態なのだ。

「貴公の覚悟、そしてこの状況。あい判った」

くわっ、と、目を見開く。

戦鬼の貌。

「このヘルバトラーが自ら、奴らの素っ首、ここに持てこよう」

そう言って、この義に厚き偉丈夫が壁から腰を浮かせかけた、その時である。

「ちょっと待ったあ！」

大声を上げたのは、今一人…ギガデーモンである。

「せっかくのところ悪いんだがよ… ここは俺に任せてくれねえか。いい手を思いついたんだよ」

また、下卑た笑いを浮かべる。

腰を落ち着け、腕を組み、また目を閉じるヘルバトラー。

「またか智将殿。貴公がその顔をしたときは、大概ろくでもない作戦だ」

「智将」とは、ヘルバトラー一流の皮肉である。

ギガデーモンは、多くの場合、人道にもとる、卑劣な策を立てる。そしてそれは決して、武人であるヘルバトラーの美意識と相容れるものではなかった。

だが、皮肉はいっさい通用しなかった。

ギガデーモンは、実際に自分を「智将」だと思っているのだから。

「げへへへ… あんたは相変わらず堅物でいけねえな。そんなんじや、相手を出し抜くなんが、一生無理だろうよ」

「無駄話をしている時間はない。その策とやらを話せ」

険しい顔で、エビルプリーストの叱咤が飛ぶ。

「あ？ まあ、策なんて大層なもんじゃねえ… かもしれねえな。弱点を突くのよ。奴らの仲間のな」

「弱点？」

「それを見つけたというのか」

「見つけたも何も、見りやわかるだろうが。あのジジイだよ」

二人の間に、得意顔で答えるギガデーモン。

「ジジイ？」

「あの… サントハイム王女のお付きの、老魔道士か？」

「そうそう、そいつだよ」

厭らしい笑いを、浮かべる。

「あいつは、あの仲間の知恵袋だ。いなくなれば、相当効くぜえ」

「だが」

疑問を差し挟むのは、ヘルバトラーである。

「どのように弱点を突く？ あの老体は凄まじい呪文の使い手だ。それに第一、《グリーンヘアード》や、他の仲間が、あいつを守っているぞ」

「へッ… ったく、単純筋肉バカはこれだから困るぜ」

馬鹿にするように、一笑い。

「孤立させて叩くに決まってるだろうがよ。まあやり方はいろいろあるが、手っ取り早いのは…」

「また人質か」

「お、さすがは邪神官殿、分かってるねえ」

その通り。エビルプリーストには分かっていた。

というより、容易に推測できた、と言うべきだろう。

邪悪な卑怯者の考えることなど、たかが知れているからだ。

「そう、人質を取る。そいつを帰す条件として、あのジジイを呼び出す。勿論ひとりでな。

断ればせんだろうさ」

「そして、多人数で待ち伏せて襲うわけか」

「お、冴えてるじゃねえか邪戦将殿。ようやくあんたにも、戦略の何たるか、ってのが分かってきたようだな」

その通り。ヘルバトラーにも、用意に類推できたのだ。

自分がもっとも嫌う手段を、ギガデーモンは使うに違いないからだ。

二人が内心苦々しく思っていることなど思いも掛けず、ギガデーモンは得意満面に続ける。

「呪文を使えば人質の命はないぞ、とか言っておけば、呪文も使えまい?

あのジジイは、ただ殴られ蹴られ、ぼろ雑巾みてえに死ぬのよ。げへへへ」

心底、厭らしい笑いだ。

しかし、そう思ってはみたものの、確かに、この卑劣漢の言う「策」とやらにも、一分の理は存在している。

パーティのもっとも脆弱なところを、孤立させ、相手の得意な攻撃手段を封じ、逆に相手の苦手な戦法で倒す。

それはまさに基本。それはまさに王道。

そして、ギガデーモンの言う通り、ブライがこの要求を断れるはずがなかった。

彼らは、人類の希望を背負った「勇者」とその「導かれし者たち」。そんな彼らが、人質の縁者にとっての「希望」そのものである「人質の生還」を妨げるような行動など、取れるはずが無かった。

いわば、勇者という立場ゆえの「呪縛」。

『勇者は、人々を裏切れぬ故』

後にブライ本人もそう指摘するこの「呪縛」を、意識的にか、あるいは無意識にか（さらりと「断ればせんだろうさ」と言ってのけるところを見ると、意外と後者かも知れない）、きっちり作戦に組み込む。

実に卑劣な、しかし、至極有効な戦略。

それを、エビルプリーストも、ヘルバトラーも、認めざるを得なかった。

「成る程。いいだろう」

「異存はない」

「よおし、ならば後は…」

と、四天王のもう一人の了解を取ろうとして… 叫ぶ。

「おい、あの極楽竜はどこ行きやがった？」

「そう言えば… 姿が見えぬな」

辺りを見回すギガデーモンとヘルバトラーに、エビルプリーストが言う。

「召集は掛けてある。じきに姿を見せるだろう」

「…ったく、どこをほつき歩いてやがる」

出鼻をくじかれ、苛つくギガデーモン。

「もしかしたら、召集掛かったことも忘れて、その辺フラフラと飛んでるんじゃねえのか？

体も軽けりや、オツムも軽いと…」

「誰のオツムが軽いって？」

天井から、いや、頭上の虚空から突然、声が響いた。

「来たか」

エビルプリーストの言葉と同時に、声のした辺りに、黒い穴が開いた。

そう、突然、何もない空間に、穴が開いたのだ。

そして穴の中から、紫色の竜が飛び出した。

「よっ、と！」

体が全て出きると同時に、穴が消える。

ばさっ…ばさっ…

ゆっくりと翼をはためかせ、器用に滞空する。

「《邪竜長》アンドレアル、只今参上。ってな」

ドラゴン、また鳥などの飛行生物より成る「飛竜軍団」軍団長、《邪竜長》アンドレアル。

ギガデーモンやヘルバトラーに比べると小柄な、といつても、人間やエビルプリーストに比べれば十分すぎるほど大きな、引き締まった躯を、淡い紫色の鱗が覆う。

鱗の表面は、まるで真珠のような、複雑な虹色の艶を湛えている。

逆三角形の鋭い面持ちに、鋭い牙と二本の角、大きな翼、そして金色の瞳。

まさに芸術品のような姿から發せられるのが、先程のような、ともすれば軽薄とも取られかねないような口調の台詞である。

勿体無いと言うべきか、残念と言うべきか。

「只今参上じやねえよ、この極楽竜が」

悪態をつくギガデーモン。

「召集掛かってただろうが。どこで道草食ってやがったんだ」

「まあまあ、そうカリカリしなさんなって。遅刻した分、土産はきちんと持つて来たぜ」
人を食ったような、アンドレアルの態度である。

「土産？」

尋ねたギガデーモンではなく、エビルプリーストに向か、紫の竜は言う。

「おう邪神官殿、例の《緑の髪の少女》だ。フレノールのちょっと南を南下してる…
恐らく、行き先はサントハイムの王城だな」

「！？」

エビルプリーストは、そしてヘルバトラーとギガデーモンも、一瞬、驚愕した。

その場にいなかつたにも関わらず、アンドレアルは、今回の会議の主役である倒すべき敵を把握し、そして彼らの欲しかった情報を、しっかり収集していたのである。

「おめえ…何で…」

「何で、《緑の髪の少女》を探してたか、って？」

悪戯っぽく、アンドレアルは笑った。

「そろそろ、邪神官殿が音を上げる頃じゃないかと思ってね」

ピクッ！

エビルプリーストの片眉が吊り上がる。

「そしたら、このタイミングで緊急招集だ。きっとあの小娘の件だと思って、探してたわけさ…っと」

己の発言が、眼前の老人の自尊心を土足で踏みにじったことに気が付いたのだろう。慌てて付け足す。

「いやいや、音を上げるって、別にあんたが弱いって言ってるわけじゃないさ…」

アンドレアルの双眸に、険しい光が宿る。

「…あちらさんが強すぎるんだ」

「！」

彼が何を言おうとしたのか、察したのだろう。思わずエビルプリーストが制止する。

「貴様…！」

「いいや、いい機会だ。言わせてもらうぜ邪神官殿」

アンドレアルの舌鋒は、止まらない。

「あれは…あの小娘は、『勇者』なのだろう？ デスピサロ様とあんたが殺し損なった」

「！！」

大會議室の時間が、止まる。

魔族の、タブー中のタブー。

この極楽竜は、そこに、何ら物怖じせずに斬り込んできたのである。

「…今のは聞かなかつたことにしておく。もしも今の言葉がデスピサロ様のお耳に入れば、貴様の命は無いぞ」

額の冷や汗を拭いもせず、ようやく声を絞り出したエビルプリーストに対し、アンドレアルは一切悪びれる様子が無い。

「いやまあ、聞かなかつた事にするのは勝手だけどよ。それであいつらには勝てるのか？」

「何だと？」

再び、時間が凍る。

「俺たちが考えにやあならんのは、『勇者』を倒す手立てだ。^{エス}^タ^ー^ク地獄の帝王すら倒す、そんな出鱈目に強い奴らに、俺たちは勝たなきやならんのだろう？」

まずはそこからだ。そこを、あいつらの強さをしっかり見なけりや、肝に銘じなけりや、あいつらにや絶対に勝てやしないんじや無いのか？」

それは、魔族軍にとって、絶対的なタブーであると同時に、圧倒的に正しい指摘だった。このようなことを、ズバッと、歯に衣着せず言えてしまう。それがこの飛竜の長所であり、欠点でもあった。

「ならば、貴公なら何とする邪竜長殿。その『出鱈目に強い奴ら』に、貴公なら勝てるか」

「さあね」

ヘルバトラーの重い問いを、しかしひらりと軽やかに躲すアンドレアル。

「おい！」

その無責任な態度に、思わず声を荒らげるギガデーモン。

「まあ、真っ当に正面からぶつかっても、恐らくは勝てんだろうな。…どうだい邪戦将殿、俺は間違ってるかい？」

「…いや」

むつとした顔で、ヘルバトラーが答える。

正々堂々と正面から戦い、力で叩き潰す。そのような戦いを好むヘルバトラーには、不愉快以外の何物でもない質問であった… 正しい指摘ではあったが。

「ただ、あいにく俺は、策略やら陰謀やらってのが苦手でね。そういうのは、邪魔王殿にでもお任せしたいところだ」

澄まし顔で言うアンドレアルを、複雑な表情で見やりつつ、重い声色で、エビルプリーストは言った。

「ちょうど今、その話をしていたところだ。ギガデーモン、アンドレアルにさっきの策を説明してやれ」

「お、おう」

いきなり振られて、一瞬虚を突かれた格好になったギガデーモンであったが、すぐに先ほどと同じ得意顔で、自分の「策」を語り始めた。

*

「…へえ、なるほどねえ」

全てを聞き終わり、さも感心したように、言葉を漏らすアンドレアル。

「我とヘルバト^{こたび}ラは、此度の作戦をギガデーモンに任せるつもりでいる。貴様はどうだ」

エビルプリーストの問い合わせ。ここでまとまれば、すぐにでも作戦を開始できる、そんな局面である。

「ああ、問題ない。ここは我らが邪魔王殿の素晴らしい作戦に期待するとしよう…」

…が。

「…ただし」

ピクッ！

今度は、ギガデーモンの眉根が吊り上がる。

気にせずに、アンドレアルは続けた。そしてその口から再び、火種が放たれる。
「次は俺がやる。それが条件だ」

「次イ！？」

ギガデーモンが、頭上に滯空するアンドレアルを睨み付ける！

「俺が失敗するって… 言いてえのか？」

「そうならないことを、祈っているがね」

あくまで飄々とした、アンドレアルの口調である。

「世の中ってのは、何が起こるか分からんからな。万が一、ってこともあるかもしれないだろう？」

「万が一なんざ無え！ だから次も無え！ 僕があのジジイをぶち殺して終わりなんだよ！」

「やめんか」

額に青筋を浮かべて叫ぶギガデーモンを、エビルプリーストがたしなめる。

「…ちっ」

大きく舌打ちするギガデーモンと、滞空しながら器用に、わざとらしく肩をすくめるアンドレアル。

「まあいいさ。何度も言うけれど、万が一なんかない方がいい。心からそう願ってるよ。

お前さんがあの魔法使いを殺すところを、この目で直に見たいぐらいさ」

「ああ、見に来ればいい」

ギガデーモンが、吐き捨てるように答える。

「なんなら、十三匹全員で見に来たって構わねえぜ」

その瞬間である。

上空から、アンドレアルが、ギガデーモンに飛びかかった！

貫手の^{ぬきて}ごとく、右手の爪を、ギガデーモンの頭部に向け突き出す！

「！」

ピシッ！

慌てて上体を後ろに引くギガデーモンの頬を、右人差し指の爪がかすめた！

頬を一筋伝う、赤い血。

スタッ！

そのまま着地し、右手を床についた前傾姿勢のまま。

ギガデーモンの方を見もせずに、アンドレアルは言った。

「アンドレアルはただひとり。そう言ったはずだ。いつになつたら覚えてくれる？」

口調が、声が、先程と違う。

まるで、地獄の底から響くような声。

「テメエ…」

ぶるぶると震えるギガデーモン。それは怒りか、恐怖か。

「そんなに物覚えの悪い脳味噌なんか要らんだろう？

次は避けるなよ、俺が今度こそ、その首から上を始末してやる」

今度は、肩越しに振り返って言うアンドレアル。その瞳は、憎悪に満ちていた。

「貴様もよさんか、アンドレアル」

再び、エビルプリーストが諫める。

この、アンドレアルの豹変。

そして「十三匹全員で見に来たって構わねえ」という、ギガデーモンの謎の台詞。

デスピサロ四天王、《邪竜長》アンドレアル。

そのトップシークレットが、これであった。

アンドレアルは一人。
しかし、アンドレアルは十三体いる。

この現象を、正確には、何と呼べばいいのだろうか。

「アンドレアル」は、十三体の竜の、統一された人格なのである。

あるいは、逆に言えば、「アンドレアル」というひとつの人格が、各々別の十三体の竜の身体を操っているとも、言い換えることができる。

普段は、動くのは一体のみ。他の十二体は、彼の「住居」にこもって動かない。

もし、アンドレアルの体が傷つく、さらには、(万が一にも)斃れるなどということがあれば、即座に「他の体」がその代わりをする。

まるで仲間を呼ぶがごとく、別の体をその場に呼び寄せることが出来るのだ。

さらには、彼は、短時間であれば、それらの十三体を同時に操ることすら出来る。

無論、彼はデスピサロ四天王の一角、臂力はヘルバトラーやギガデーモンには及ばぬまでも、先ほど見せたごとく、ギガデーモンに反撃を許さぬほどのスピードと鋭い爪、また火炎を吐く能力は、凡百の化物の遠く及ぶところではなかった。

しかし、その力すら及ばぬ敵が彼の前に(仮に)出現したとしても、一気に十三体のアンドレアルが敵を襲う… その必殺の布陣を破ることは、到底不可能。

まだ誰にも見せたことのない、彼の「最大の奥の手」であった。

ただし。

これらの事…

アンドレアルが十三体いること。十三体のアンドレアルが「ひとり」であること。

これは、基本的にはデスピサロと他の四天王しか知らないトップシークレットである。

さらには、彼の「体」が、普段どこに安置されているのか。

言い換えれば、彼の「住居」はどこなのか。

それは、他の四天王はおろか、デスピサロすら知らぬ、まさに秘中の秘であった。

どこからともなく現れ、いつのまにか存在し、そして、事を為せば、いずこへとも無く去って行く。

飄々とした縛られざる者。^{アンチエイン}

それがアンドレアルである。

そして。

アンドレアルは、この「秘密」に他人が触れること、この「秘密」を他人が口にすることを、極度に嫌う。それは、先ほどギガデーモンが(図らずも)見せてくれた通りである。

仲間にすら襲いかかるほどの激昂…

それは、もしかしたら、十三の体を持つ彼が、「自分はただ一人である」と、そうでありたいと強く思う、その心の裏返しであるのかもしれない。

*

「…ふん」

鼻を鳴らし、紫の巨竜は立ち上がる。

「まあいいさ。一応言っておくが、さっきのは本心だからな」

「『さっきの』？」

「お前さんが失敗しないことを祈ってる、俺はさっきそう言ったぜ」

訝るギガデーモンに、元通りの口調で言うと、右目でウインク。

そして翼をはためかせ、舞い上がった！

それと同時に、彼らの頭上、天井近くに形成される、漆黒の次元の裂け目！^{ワームホール}

人間の持つ瞬間移動呪文とは異なり、閉ざされた部屋の中ですら行使可能な移動呪文。

魔族の血が流れる者にのみ、可能な業である。

「！ どこへ行く！」

アンドレアルの羽ばたきが巻き起こす風から、左腕で顔をかばいながら、エビルプリーストが叫ぶ！

「なあに、ちょいと野暮用だよ」

また軽い口調で答えると、アンドレアルは、

「よっ、と！」

現れた時と同じ掛け声を残し、次元の裂け目の中に消えて行った。^{ワームホール}

穴が次第に小さくなり、消滅する。

*

「ったく… いけすかねえ野郎だぜ」
悪態をつくギガデーモン。

「その怒りは、実際の作戦までとつておけ。同意は得られたのだからな。あとは貴公の仕事だ」
目を閉じて腕を組み、壁にもたれかかり…変わらぬ姿勢でヘルバトラーが言う。

「お、おう」

この一言で頭が冷えたギガデーモンに、次はエビルプリーストの指令が飛んだ。
「ギガデーモンよ、さっそく作戦に移るのだ。奴らを殺し尽くせ。根絶やしにしろ。貴様の、いや、魔軍団の全能力をもってだ」
「おうよ。目に物見せてやるぜえ…げへへへ」
ヘルバトラーとエビルプリーストの期待を一身に背負っていると思ったのだろう。すっかり機嫌が直った様子で、再び「策士」の顔をして言うと、ギガデーモンは、右手の人差し指を高々と天に掲げた！

先程のアンドレアルの時と同じく、頭上の虚空に、大きな穴が空く！
「《鬼ヶ島》へ！」

叫ぶと同時に、ギガデーモンの巨体が宙に浮き上がり… 穴に吸い込まれて行った。

*

部屋に残ったのは、二人。
「《鬼ヶ島》と言ったな…。漆黒の部隊を使うのか」
「魔軍団の、あの黒い一つ目巨人の部隊か」
「彼奴も、本気になったようだな」
淡々と語り合う、エビルプリーストとヘルバトラー。

「エビルプリーストよ」
しばしの沈黙の後、ヘルバトラーが切り出した。
「む？」
「あいつは勝てると思うか」

数瞬の沈黙の後、老獴なる神官は答えた。
「彼奴が敗れても、次はアンドレアルがぶつかる。それでも駄目なら、貴様か… あるいは改めて呪霊軍団をぶつけても良い。いかなる勇者といえど、さすがに耐え切れまい」

「…あいつらは捨て駒、ということか。そして俺も」
呻きにも似た、苦々しげなヘルバトラーの返答にも、やはり、エビルプリーストの声色

は変わらない。

「アンドレアルの言った通りだ。ギガデーモンがやってくれれば、それに越したことはない。それが成らなんだ時にどうするか、それを考えるのが我が仕事だ」

「なるほど」

ヘルバトラーが再び苦笑する。

「やはり、貴公らの考えている事は俺には分からん」

言うと、身体を壁から起こし、出口へとゆっくりと歩を進める。

「《魔獣の穴》に行ってくる。兵どもの練度を上げておきたい」

振り向かず言いながら、出口の巨大な扉を開く。

「…いつお鉢が回ってきても良いようにな」

ヘルバトラーの最後の言葉と同時に、扉が閉まった。

自ら作り上げた練兵場に出向き、配下の化物たちの戦闘力に磨きをかける。

武人の発想であり、その魂の発露であった。

しかし…

一人残された会議室で、エビルプリーストは思う。

(貴様は強い。心も技も。確かに四天王随一…

だがヘルバトラーよ、それだけでは勝てぬ相手というものが、この世には存在するのだ)

*

「…ってえわけだ。要するに、あの魔法使いをぶち殺しやあ、それでいい」

イムル沖に浮かぶ群島のひとつ。

原始の森と岩山より成る、人の住まわぬ名もなきその島は、しかし化物にとっては、ギガデーモン麾下の魔軍團、その精銳《漆黒の部隊》の本拠地《鬼ヶ島》として、その名を知られていた。

この島で、ギガデーモンが直接指示を与える人物は、ただひとり。

神の気まぐれが産んだ変種。

闇の色の膚を持つ、巨大なる一つ目巨人。

《漆黒の部隊》部隊長、「漆黒の巨人」であった。

「わかりました」

本来ならばギガデーモンを見下ろすほどの体躯の持ち主である漆黒の巨人だが、今は、ギガデーモンを前にその体を屈め、跪き、頭を垂れている。

絶対の忠誠を、彼は自らの指揮官に誓っているのだ。

「んじや、頼んだぜ」

踵^{きびす}を返し、瞬間移動呪文を使おうとするギガデーモンを、黒き巨人が呼び止めた。

「…ひとつだけ、質問してもよろしいでしょうか」

「んあ？」

弛緩した顔^{リラクゼーション}で振り返るギガデーモンに、蹲踞^{レジヨン・ノワール}の姿勢を崩さず、巨人^{ギガテスク}が問うた。

「この《漆黒の部隊》総勢百四十一名、その全てを注ぎ込まねばならぬとは…

その人間の魔導士、それほどのものなのでしょうか」

「ん～…」

少しだけ考え込んで、ギガデーモンが発した答え。

「やっぱり、おめえもそう思うかい」

「？」

発言の真意を図りかねる巨人^{ギガテスク}に、ギガデーモンはさらに畳み掛ける。

「俺も、内心はそう思ってるんだがなあ… 今回はちょっと、雲行きがおかしいんだよ」

「雲行き？」

「エビルpriestの爺さんのビビり方が半端ねえんだ」

「エビルpriest様… ですか」

いまだに、巨人^{ギガテスク}には、話が見えてこない。

「いやな、さっきまで、四天王で会議をやってたんだが、その時にあの爺さんがな…。」

『我が《呪靈軍団》の…いや、我的手にも負えなくなつた。力を貸して欲しい』だとよ』

全く似ていない物真似を挟んで、ギガデーモンは話し続ける。

「もちろん、そりやあ、あの緑の髪の小娘と仲間全員引っこくるめての話だ。魔導士一人の話じゃねえ… でもよ」

神妙な顔。

「俺は、あの爺さんが、あんなに不安そうな物言いをしたのを初めて聞いたんだ。

ずっと魔導軍団暮らしのおめえは知らねえかもしけねえが… 正真正銘のバケモン、つてやつなんだぜ、あれは」

声が上ずる。

「あの爺さんがあれだけビビる相手だ、何かあるのかもしれん。

まあ、今回は相手がジジイだけだし、何も無きや無いでいい。全員で思い切り、細切れにでも挽き肉にでもすりやあいい。過剰殺^{ミンチ}大いに結構、ってやつだ」

そう聞いて、ある程度得心がいったのか。

「わかりました。ギガデーモン様のご不安、我ら《漆黒の部隊》が、杞憂に終わらせてご覧に入れましょう」

蹲踞の姿勢のまま、巨人^{ギガテスク}は力強く宣言した。

「ああ。おめえらは絶対に期待を裏切らねえ。俺の自慢の部下どもだ…
くれぐれもよろしく頼むぜ」
にたり、と笑う。
初めて見た人には不快感を催させるような笑いだが… この男は、もしかしたら、こんな笑顔しかできないのかもしれない。

お馴染みの黒い空間の穴に、ギガデーモンが消えた後。

(ギガデーモン様が、ここまで期待を掛けて下さっているのだ… 我らもそれに全力で応える。何を迷うことがあろうか)
顔を上げた^{ギガテスク}巨人の単眼、その大きな瞳が燃えていた。
立ち上がると、大音声で叫ぶ！
「野郎どもオオオオッ！ 集合だアアッ！！大仕事だぞオオオオオオオッ！！！！」

《凍嵐の魔人》サントハイムのブライ対、魔族軍・魔鬼軍団《漆黒の部隊》。
この《鬼ヶ島》がその戦場となるのは、この翌々日のことである…。

*

「ちょいと、ごめんよ」

地上のどことも知らぬ、連山の中腹の洞窟。
その入り口に、足を踏み入れようとする者がいた。
紫の鱗の巨竜。
魔族軍・飛竜軍団団長、《邪竜長》アンドレアルである。

「ここに居てくれると…有難いんだがな…っ！」
彼の言葉は、中断された。
彼の背後から、突然の凄まじい殺気が巻き起こったのである！

「何者だ」
静かに、しかし強い口調で、殺気の主が言う。

ほぼ、人間と同程度の身長であった。
姿形も、人間のそれとほぼ等しかった。…一箇所を除いて。
彼には、翼が生えていた。

背中から生えた、灰色の、鳥のような一対の翼をはためかせ、彼は空を飛んでいた。
そして、右手にはめた 手甲^{ガントレット}の、手の甲に取り付けられた鋭い刃を、アンドレアルの後頸部に突きつけていた。

「おっと、悪い悪い。覗きのつもりはなかったんだがな」
両手を上げる巨龍。その姿と声には、殺気の主にも覚えがあった。
「…！ アンドレアル様！？」
慌てて地面に降り立ち、地べたに頭をすりつける。
「お、お許しを！ 貴方様とは思わず、つい…」
「いやいや、悪いのはこっちだ。かえって済まなかつたな」
ようやく相手の方を向き直り、アンドレアルが言う。

若い男であった。
褐色の膚を、^{はだ}上半身は露わにし、下半身も、膝下までのゆつたりしたズボンひとつ。
同じく褐色の精悍な貌^{かお}に、強い眼力。
両頬には、上から下に、紅で二本の線が引かれている。
頭に、鳥の羽を幾重にも重ねた飾り布を付けている。我々の世界で言うところの、ネイティブアメリカンの長老が付けているような…といえば、伝わりやすいだろうか。

一体、この男は何者であろうか？

「しつかし、相変わらずいい殺気してんなあ。それにその得物も、手入れは上々、ってとこかな」
「…返す返す、申し訳ございません」
「いや、だからいいっての。俺は褒めてるんだ」
先ほど刃付き手甲^{アームドトレット}を突きつけられた首筋をさすりながら、アンドレアルが言う。
「そいつを存分に生かしてもらう事態に… なるかもしれないんでな」

「！」
男が思わず顔を上げる！
「アンドレアル様…！？」
「といつても、今んとこは『かもしれない』だがな… とりあえず今日は、戦時待機命令を出しに来た」

戦時待機命令、つまり「戦う準備をしておけ」という命令に、男は色めき立った！
「戦ですか！」
「戦…というか、どちらかと言うと『暗殺』だな。ただし一筋縄じやいかん相手だ。
文字通り、戦になるかもしれない。だから俺はここに来た」
「…標的は？」
「《緑の髪の少女》」

「…なるほど」

現時点で、魔族軍にとって最大の敵。それが『緑の髪の少女』の一行であった。
それを倒せ、と、その命令が、彼の元にやって来たのである。

「御老体…って言い方は失礼だな。エビルプリーストが根を上げてな。呪霊軍団ではどうしようもないとさ」

「その尻拭いを、私が？」

「いや、言ってみれば『尻拭いの尻拭い』ってどこかな」

「尻拭いの…尻拭い？」

「今、我らが邪鬼王殿が、既に事に当たっている。例によって、卑怯な浅知恵出してな」

アンドレアルは、決してギガデーモンの事を良くは思っていない。少なくとも、本気で首を落とそうとする程度には疎ましく思っている。それは先ほどご覧いただいた通りだ。
だが…

「ただ、あの御仁も、ああ見えてその辺のツボは心得ているからなあ。

意外と上手く行くんじゃないか、と俺は思っている。まあ、俺もその方が楽だしな」
その言葉の通り、彼もギガデーモンの実力自体は、それなりに評価しているようだ。

「しかし、貴方様は、私のところに来て下さった」

期待のこもった眼差しで、男はアンドレアルを見上げる。

「それ以上は言わせるなっての」

アンドレアルが苦笑する。

それがたとえ、本当にギガデーモンの不首尾を見越しての行動だったとしても、部下の手前、身内の失敗を期待する発言など出来るはずが無い。

「何はともあれ、現時点では待機。あのブサイクの尻を拭わなければやあならない羽目になつたら、しょうがないから拭う。変更があればまた知らせる」

「心得ました」

恭しく、男は頭を下げた。

*

どうやら、アンドレアルの部下であるらしい、この男。

果たして、彼は何者なのか。

どんな能力を持っているのか。

残念ながら、それは、今は明かす事ができない。

彼のことは、今は忘れていただいても構わない。
然るべき時が来たときに思い出していただければ、それでよい。
そして、その時は必ずやってくる。

読者諸氏におかれでは、今はひとまず、《^{オーガアイル}鬼ヶ島》の戦いに、我らがブライの孤軍奮闘に、注視いただきたい。

それもまた、程なく語られるであろうから…。

(終)